

貝坂倶楽部

—季刊 2016 特別号 通巻第 35 号—



樋口一葉にゆかりのある平河町一丁目。
江戸名所図会には「この地は昔から甲州
街道にしてその路傍にありし一里塚を土人、
甲斐塚とよびならわせしとなり」とある。貝
塚であったのが現在定説となっている。



発行 NPO つくしくらぶ

目次

寄稿者一行紹介

クマと自然環境	藤原 英郎	3
食料を産み出す土	井上 栄	4
Nihonbashi Narrative	Louisa Rubinfiem	8
さざ波に寄する	河野 汀	11
Japanese Food Culture	Kate Deaux	15
滋賀の魅力	藤井 能成	18
Toko Shinoda	Michelle Arnot	23
つながった思い出	湯沢 雍彦	28
四国瀬戸内の一人旅	高松 良晴	29

寄稿者一行紹介

藤原 英郎	銀行員、現役時代に英国、スイスに勤務
井上 栄	大妻女子大名誉教授
Louisa Rubinfien	a historian
河野 汀	物理学者
Kate Deaux	a teacher
藤井 能成	化学系技術者、分離膜研究開発に従事
Michelle Arnot	a writer
湯沢 雍彦	お茶の水女子大学名誉教授
高松 良晴	国鉄マン、鉄道建設改良工事に従事

- 出てみてわかった日本 -

クマと自然環境

藤原英郎

昨年はドングリが不作であり、クマの被害が多い。
日本では本州のツキノワグマが8千から1万2千頭、北海道のヒグマが2千頭程度生息している。ツキノワグマは毎年2千頭前後が狩猟と有害駆除で捕殺されている。クマのような大型野生動物がこのように多く生息していることは、日本の自然環境保護がいかにすばらしいものであるかの証拠である。

中世までのヨーロッパはクマの住む深い森におおわれていた。ドイツのベルリンや、かつて家族とともに暮らしたことのあるスイスの首都ベルンの語源はいずれもクマである。現在、ヨーロッパには野生のクマは一頭もない。中世以来の開墾の結果、森はなくなり畑や牧草地に変えられた。大規模な自然破壊である。そして、クマは絶滅した。ベルンの有名なクマ動物園にいるのはよそから連れてこられたクマたちだ。

捕殺は悲しいことだ。日本に棲む多くのクマさんたちとの共存を続けていきたい。



知床半島で自然と共生するヒグマ

(貝坂倶楽部第一巻巻頭のエッセイです。以降続いた季刊誌の核となりました)

食料を産み出す土

井上 栄

二十一世紀、世界の食料供給がどうなるかは大きな関心事である。増える需要に対し耕地面積、水の供給が頭打ちであることは今まで議論されてきたが、作物を生長させる土の養分に関しての話はあまりなかったように思う。私は農業や土壌の専門家でないが、土についてあえて考えてみたい。

現在「世界の穀倉地帯」は米国中西部の大平原グレートプレーンズである。ここは肥沃な黒土で小麦、大豆、トウモロコシが大量に生産され、世界に輸出されている。日本人が消費する小麦・大豆の約半分、トウモロコシの8割はここで作られている。

1960年代、高度経済成長が始まった頃から日本人の肉・鶏卵・牛乳の消費量が増えた。それまで主な死因であった脳出血が減ったのだが、動物性食品をたくさん摂るようになったことが貢献したと考えられている。工業製品を輸出して獲得した外貨で肉を輸入し、また大豆・トウモロコシを輸入し国内で家畜・家禽を飼った。現在は経済成長を続ける新興国で肉の消費量が増えているが、米国がその主要な供給国である。

作物を産み出すのは土である。植物は水・炭酸ガス・太陽エネルギーからブドウ糖を作り（光合成）、これが植物および動物の活動に必要なエネルギーの元になる。動植物にはエネルギー以外にも体を作る蛋白質が必要であり、その元になるアミノ酸は植物が土から吸収する無機窒素を使って合成する（動物は合成できない）。他に土から吸収する重要な物質はカリKとリンPである。したがって農地から毎年作物を持ち去れば土の中のK、P、窒素が減っていくので、これらを（三大）肥料として農地に補給しなくてはならない。以下では、土のK、Pの量について考える。

植物を燃やすと有機物は気体となり無機質（ミネラル）の灰が残る。灰の中、すなわち植物体の中のミネラルは、多い順にK、カルシウムCa、マグネシウムMg、Pである。一方、土中にはK、Pは少ない（下表）。これがKとPを肥料とする理由である。それら肥料はカリ鉱石、リン鉱石から作られており、いずれそれら鉱石は掘り尽くされる。わが国のK、P肥料はすべて輸入品であり、今後とくにPが世界的に逼迫するといわれている。

プラトン：人間は逆立ちした植物

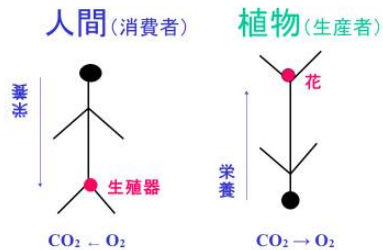


表 地殻の化学組成 (理科年表)

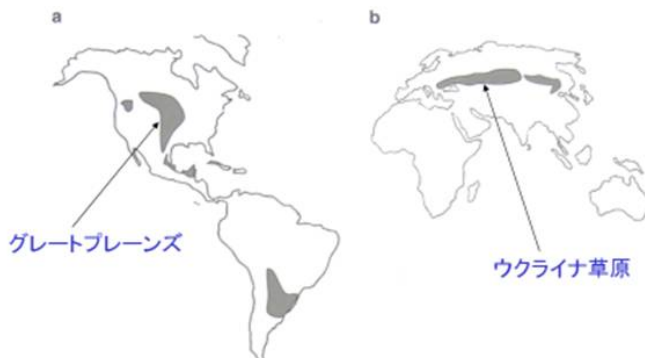
元素(酸化物)	重量%
珪素 SiO ₂	55
アルミニウム Al ₂ O ₃	15
カルシウム CaO	8.8
鉄 FeO	8.6
マグネシウム MgO	5.2
ナトリウム Na ₂ O	2.9
カリウム K ₂ O	1.9
チタン TiO ₂	1.6
リン P ₂ O ₅	0.26
マンガン MnO	0.18

土は、岩石が風化で細くなった微粒子*が母材となって出来たものである。土には藍色細菌(シアノバクテリア)が棲んでいて、空中から窒素を固定している。海にいた植物が陸に上がったのは5億年前であるが、それ以前に細菌が固定した窒素が地上にあったのだ。植物は光合成を行い、地面に固定された窒素を使い、根を地下深く伸ばしミネラルを吸い上げて生長した。植物が枯れたあとの遺骸は土中の細菌、菌類、ミミズなどによって分解される。ただし有機物の分解は完全ではないので、時間が経つにつれて色の着いた有機物が地表近くの

土に溜まっていく。K、Pなどの無機ミネラルも溜まる。この黒褐色の土(森林では深さ30センチほど)を「表土」といい、ここを開墾すれば小麦栽培に適した畑になる。

地球は7~1.5万年前の間は最終氷河期にあり、ヨーロッパ大陸と北米大陸の北半分は氷床(大陸氷河)で広く覆われていた。その厚さは1千から数千メートルもあった。氷は海水が蒸発した水から出来たものであり、極寒期2万年前の海面は今より120メートルも低かった。この氷河はゆっくりと動いて巨石を遠くへ運んだ。ニューヨーク市中央公園の大石やボストン近くのプリマスにあるPlymouth Rock(1620年、清教徒がメイフラワー号からこの石を踏んで上陸した)は氷河が運んだ「迷子石」である。地面には巨大な圧力がかかっており、岩石が削られ莫大な量の微粒子が生じた。1万5千年前に氷床が消えたあと、この微粒子が風で舞ってある場所で厚く溜まった。風の向きによってユーラシアでは西から東へウクライナからカザフスタンにかけて、北米ではロッキー山脈の東麓の南北にかけて溜まった(下図)。ここが「世界の穀倉」となった。

肥沃な温帯の草原



この場所は、温帯で年間雨量が 500 ミリメートル以下なので森林でなく草原である。雨量が少なく高温でないために、草が表土に溜めたミネラルは水で流されず、また有機物は分解されにくい。土は黒色で「チェルノーゼム Black Soil」と呼ばれ、厚さは 1 メートルにもなっている。この黒土が出来るまでには微粒子が積ってから数千年がかかったといわれる。

和辻哲郎著『風土』（1935 年）の中の一文「ヨーロッパには雑草がない」はあまりにも有名である。1927 年、和辻がドイツへ留学したとき乗った船はフランスまで 45 日かかった。その船に農学者・大槻正雄も乗っており、二人は日本と他国の風土の違いについて議論を交わした。大槻は、晩年に日本風土論『稲と杉の国』（富民協会、1968 年）を著し、ヨーロッパの小麦畑には雑草が生えず除草の必要がないことを書いている。ヨーロッパは日差しが弱いだけでなく、氷河期に植物が凍結されていたため、生物多様性が極めて小さい。たとえば樹木の種類は日本では千種を超えるのに、ヨーロッパ全域でも百種以下である。カエデは日本には 23 種あるのに、ヨーロッパ全土にも北米大陸全体にも 13 種ずつしかない。欧米の紅葉の彩りは寂しいのである。逆にこのような風土は小麦の単作 monoculture に適しているのだ。

ウクライナ国旗のデザインは、上半分が青色、下半分が黄色である。上は青空を、下は地平線まで続く稔った麦畑を表す。ここの黒土では肥料を与えないで麦が何回も収穫できるそうだ。ヒトラーはこの土地を欲しがった。この黒土ほどでないにしても、他のヨーロッパ諸国にも氷床が残した土がある。現在、小麦を輸出している国は、輸出量の多い順に米国、カナダ、フランス、豪州、ロシア、ウクライナ、ドイツである。豪州を除いていずれも氷床が作った土のあるところだ。

さて米国の大平原のことだが、二十世紀、役畜の代わりに機械を使う農業が行われ、農産物が過剰に生産され外国へ安く売り出された。冬作物の小麦だけでなく、夏作物の大豆・トウモロコシも栽培されている。雨水だけでは不足するので、地下のオガララ帯水層（日本国土の 1.2 倍の面積）から水を汲み上げ、スプリンクラーをつけた巨大な時計針（数百メートルもの長さ）のようなものが回転しながら畑を灌漑している。乾燥地帯なので水は蒸発し、水に含まれる塩分が土に蓄積し塩害が起こり、その畑は廃棄されている。昔メソポタミア文明が滅びたのは、灌漑による塩害のためだったのだが、似たようなことが北米で起こっているのだ。地下水に補充はないので、今世紀中に枯渇すると考えられている。畑からは窒素とミネラルが失われるので肥料が投入されるのだが、化成肥料には植物が必要とする微量の銅、亜鉛、モリブデンなどの元素は含まれていない。つまり現代の欧米の農業は、氷河期が終わってから生れた「若い土」という遺産を食い潰しているのである。

ところで雨の多い熱帯モンスーンアジアの土は痩せている。生成されてから百万年も経っている「古い土」では雨水によって土のミネラル養分が徐々に流されており、水に溶けないで残った酸化鉄で赤い色になっている。高温のために有機

物は分解されて窒素も失われている。氷床に覆われなかった熱帯雨林の生物多様性は大きいのだが、その森林を伐採してプランテーションにすれば、そこはいずれ不毛の地になるといわれている。

しかしモンスーンアジアは水稻の栽培には適した場所である。水田では大河が上流から泥（岩石が風化して出来た若い土）を運んでくるために、ミネラルが毎年供給されているのだ。乾燥地帯のエジプトでもアスワン・ハイダム建設前には、ナイル川が運んでくる泥で小麦の連作が可能であった。現在、米の輸出国はベトナム（メコン川下流域）、タイ（チャオプラヤ川下流域）、インド（ガンジス川下流域）である。そこで最近米の増産ができた理由は、空中窒素と天然ガスから合成する窒素肥料を大量に使った「緑の革命」のお蔭である。小麦畑と違うのは、ミネラルが上流から供給されていることである。

日本列島（ジャワ島も）では、ミネラルは火山灰から補給されている。ここは地震・津波・噴火が起こる天災の国であるが、降水量が多く、夏暑く、時おりの噴火でミネラルが供給されるために植物が繁茂し、さらに豊饒の海に囲まれているという天恵の国でもある。将来いつか「世界の穀倉」がなくなると、日本人はその天恵を生かした米・魚・大豆の食事に戻ることになるだろう。

*注 表の地殻各成分の値は岩石の平均値である。珪素とアルミニウムが多い。岩石が物理的風化作用によって直径2ミクロン（0.002ミリメートル）以下になった微粒子の内部で、水の存在下で化学的風化作用が起こり、酸素・珪素・アルミニウム原子が繋がって平面に広がる分子シートが多数生成される。このシートの珪素・アルミニウムは水に不溶性であり、生物に害とならない。シートはマイナスに荷電しているので、水溶性のプラス荷電のCa、Mg、Kイオンが引き付けられて、水に流れ出ないで植物に利用される。この粒子を「層状珪酸塩鉱物」という。（2016.4）

Nihonbashi Narrative

Louisa Rubinfi

The first person I met in Nihonbashi-kobunacho was the proprietor of a little *akachochin*. He welcomed me to the neighborhood by telling me about the Kobunacho lantern. Do you know it? It is the enormous red lantern that hangs at the far end of the Nakamise at Sensoji, more enormous in fact than the very famous Kaminarimon lantern at the front. It has hung there since the 18th century, and it is Kobunacho's pride and joy: every decade or two, the neighborhood undertakes the (considerable) cost of removing, repapering, and restoring it to its place in a ceremony full of pomp and pleasure.



I moved into the Nihonbashi-kobunacho neighborhood in 2009. The real estate listing had it posted under the nearest station name, Ningyocho, so actually I had no idea that I was in Nihonbashi, and I had never yet heard of Kobunacho. It seemed unlikely that this seemingly ordinary little slice of Tokyo should occupy such pride of place, and I wondered if I'd misunderstood the lantern tale. But it was then, on my very first encounter with it, that I, too, began to feel proud of being from Kobunacho.

It is something of a truism to describe Tokyo as a collection of little villages. I assumed that Nihonbashi was one of them, marked by the bridge, presided over by Echigoya-turned-Mitsukoshi, and extending into the adjoining commercial districts. It was not until I lived there that I understood that Nihonbashi itself is a collection of little villages, that it is formed of even smaller units. Odenmachi, Hakozaicho, Kabutocho -- all dozen and more are actually hyphenated names that express dual identities, the first being the prefix Nihonbashi and denoting the commercial center of Edo, and the second being occupation, status, shrine, dyers' streets and bankers' blocks, *katsuobushi* row, fan-makers' alley, home.

Within a few days, I heard the story of the lantern from a barber who lived on the Ningyocho-sanchome side of the invisible neighborhood boundary line that lay in the middle of my street. His was the point of view of an outsider (and one whose neighborhood had lost its name and been relegated to a *chome*). He said in so many words that Kobunacho people really were rather too vain of their lantern. "Why, when it is so expensive, do they insist on footing the bill for its care entirely by themselves? Kaminarimon is underwritten by Matsushita; why is Kobunacho too proud to accept outside help?"

Like many city dwellers, my geographic knowledge of my new neighborhood was only that it lay within x minutes of x subway stations -- somewhere in the geometric nexus of Hibiya Line's gray, Tozai's blue, and the pink, lime, and purple lines. But it was New Year's season, so I ventured out with a handwritten *Ningyocho Shichi-fukujin Meguri Course Map* and began collecting images along with the local *Ebisu* and *Daikoku* dolls. Random corners in mega-Tokyo began to seem like "my home"; tiny shrines nestled between concrete towers became "my spots."

I found myself collecting map upon map, and they gave shape to Nihonbashi's many identities. The Cultural Treasure Walk, criss-crossed with hard-to-read *kanji*, the Edo Bus Route with cute mascots highlighting "nostalgia" and "convenience spots." All the maps speak to Nihonbashi's consciousness that it is the core of this great city, and by extension, Japan, the "I" in the *Edo-Tokyo I-ro-ha Course*, and "Always at the forefront of the times" in the *Hajimete Monogatari Mappu*.

Little by little my own images of the district accumulated, and began to take on the quality of a personal map. I discovered Edo shopfronts in Honcho and Taisho-Showa streetscapes in Ningyocho, prewar streetcar routes and postwar freeways, alleyways almost overshadowed by skyscrapers and riverways coming back to life. Radio exercises in the parks, *matsuri* in the streets. I stopped regularly to note the 1938 *kanban* propped up outside an *unagi-ya* that commemorated the day the 3rd-generation's son/this-generation's father went to war, and at the tiny Inari shrine, antecedents ancient, that hides alongside an old washing machine under the cantilevered second story of a 1980s apartment building.

Nihonbashi experienced decades of attenuation as Tokyo's core, but lately new residents and crowds of office workers have been pouring into the area, along with shoppers and tourists in record numbers, lured by a grand and well-advertised Nihonbashi revitalization effort. Now, as in so many other parts of Japan, Nihonbashi old-timers worry about the *manshon* dweller who lives too high up to participate in the festival down on the street. And about the destruction of alley life, and the costume quality of imitation Edo. But the merchant mentality is not just sentimental -- it is also practical. Nihonbashi knows its own value. The question is how can old brands compete, old networks thrive, old Edo survive in 21st-century markets, 21st-century capitalism, 21st-century Tokyo? How shall Nihonbashi change to remain the same?

In 2014, Kobunacho once again took up a collection to refurbish the lantern. So many people wanted to contribute that the *chokai* had to set limits on the numbers. When the lantern returned from Kyoto good as new, the neighborhood kept it for a few days on display in the local park. All the schoolchildren came to see, and the office workers. Time slowed down as passers-by circled it to find the names they knew, and contributors had their pictures taken with it. Finally it was returned to Sensoji, mounted in its place of glory, stretched laboriously to its full length by several men standing on ladders inside it. On a spectacularly rainy day, the *chokai* representatives went to pay their obeisance to it, distributed the requisite gifts to Sensoji's priests, drank toasts, and then returned to Kobunacho to get started on the work of the upcoming *matsuri*.

Kobunacho has apparently been asked to be ready to redo the lantern again for the Olympics, just 6 years after the last time. It will already be showing wear, my *akachochin* informant said, because the new state-of-the-art earthquake-resilient roof installed on the temple a few years ago allows the wind to race unobstructed straight in the direction of Kobunacho's lantern. Time moves faster these days, and the stress of modern times takes its toll, just as we're told.



さざ波に寄する

河野 汀

立春が過ぎて 刻々と日差しが強くなってきたある日、心弾むニュースの波が世界中に広がりました。 重力波の直接観測に成功！

2月11日 NASAのある宇宙情報のサイトを見ていたら、いつもの日替わり宇宙写真のかわりに、重大な発表があるから11時まで待て とのメッセージが出ているので これは！ と 思っていたら、ヤッパリでした。

物理学・宇宙科学の世界では、とてつもなく大きなニュースです。

100年前、一般相対性理論で予言された重力波が、とうとう実際に観測された、アインシュタインの最後の宿題に やっと解答が与えられた と ドラマ仕立てでマスコミはおおさわぎです。観測に成功したのは アメリカの“LIGO”という実験装置を擁するチームで、捕らえられた重力波は宇宙の遙か彼方で、二つのブラックホールが合体したときに発生したものである という NASA の発表が紹介されました。実は私も いまから 20 年ばかり前のいつとき、先輩に誘われて重力波検出実験に関わったことがあるので、今回のニュースにはかなり興奮しました。

当時先輩が取り組んでいたのは、“LIGO”と同じ原理の実験装置ですが、規模はずっと小さく、一片の長さ 100 メートルの L 字型レーザー干渉計でした。

重力波がやってくると空間が伸び縮みするので、L 字の二辺で長さが違うことになる。L 字のカドのところでレーザー光をスプリットして、それぞれ直角方向に射出し、L 字の二つの先端に置いた鏡で反射させて、もとの角の処にもどします。

もし 二つの方向で長さが違っていると、戻ってきた光は互いに干渉して、干渉縞ができます。この現象を使って重力波を検出しようというわけです。ただし重力波による長さの変化はとても小さく、最低でも 10 のマイナス 18 乗（百京分の一）の精度が要求されます。この精度は、月と地球との距離（約 40 万キロメートル）が、原子 1 個分（1 オングストローム = 1 ミリの 1 千万分の 1）変化しても、それを検知できる精度です。これを達成するためにはレーザー光の光路が往復 200 メートルでは短かすぎるので、レーザー光を 100 回反射、往復させるとその光路が 20 キロメートルになり、なんとかギリギリの精度を達成することができると考えたのでした。とはいっても、この超々々…精密距離計とでもいべきレーザー干渉計を、実際につくるとなると様々な困難が立ちはだかります。たとえば振動の問題。地上ではどんなに静かなところでも いろんな振動が伝わってきます。その何れもが、重力波の振動に比べるとケタハズレに大きい。こうした振動を“取り除く”ことは出来ないので、フィードバックをかけてユレをキャンセルする方法がとられます。そのためには極限といってもいい超精密電子回路の技術が必要でした。乏しい予算の中で、先輩の指導のもと実験装置の建設にあたった学生さんたちの悪戦苦闘ぶりは、今思い出しても胸が熱くなります。このさ

さやかな“宇宙観測”装置が、なんとか動き出して、まがりなりにも“観測”が出来るようになったのは、前世紀末頃だったでしょうか。

これに先立つ十数年前、1987A という超新星爆発が比較的近いところ（大マゼラン雲、地球から 15 万光年の距離）で起こりました。超新星爆発といえば、太陽の 10 倍くらい、あるいはそれより大きな星の爆発ですから、質量（密度）の変化は凄まじく、当然かなり強い重力波が発生して地球にも到達したはずです。あんな爆発がいま起こってくれば、この干渉計でも検出できただろうにと、先輩がくやしがっていたのを思い出します。超新星爆発は、一つの銀河当たり何十年かに一回程度起こるので、宇宙全体でみれば

かなりの頻度になりますが、遠い銀河で起これば そこから来る波は当然弱くなって、観測するのはむずかしくなります。1987A のように 15 万光年という、“至近距離”といえるくらい近くで起こることは、めったにない機会だったのです。

というわけで この「ミニ重力波計」では それらしいデータを得ることは出来ませんでした。

余談ですが この 1987A から放出されたニュートリノが、岐阜県の“カミオカンデ”でみごとに捕らえられ、その業績で小柴昌俊さんがノーベル賞を受賞し、その後継機種である“スーパーカミオカンデ”でニュートリノに質量があることを実証した梶田隆章さんが 昨年受賞に輝いたのは記憶に新しいところです。

で、話を今回の立役者“LIGO”にもどしましょう。このアメリカの観測装置について、私は詳しいスペックは知りませんが、L字型1辺の長さが4キロメートルといますから、充分(?)に長く、昔先輩達が取り組んでいた装置よりも1000倍以上(10のマイナス21乗、十垓分の一)の精度が得られることになります。つまり、太陽と地球との距離(約1億5千万キロメートル)が、原子1個分伸び縮みしてもそれを検知できるという、人間の感覚では想像も出来ない精度…悪魔の精度といったら笑われるでしょうか。ともかくもこの“LIGO”で重力波が捕らえられたのは、昨年9月14日で、重力波のソースは超新星爆発ではなく、ある意味ではもっと凄い(?)ブラックホールの合体でした。数十億年かけて互いに接近した二つのブラックホールが、最後に合体して一つになるときに放出する重力波を捕らえた。ここで得られたデータから、いまわかることとして、二つのブラックホールの大きさはそれぞれ、太陽の29倍、および36倍の質量を持っていた。合体後一つになったブラックホールの質量は 太陽の62倍であった。したがって合体の前後での質量差(29+36-62=3)、つまり太陽3個分の質量が 合体の瞬間に重力波のエネルギーとして放出された。この現象が起こったのはいまから約13億年前で、その位置は地球から見て南半球の方角である、等々だということです。この重力波源(あるいは この現象)は 計測された日に因んで GW150914と命名されました。

さて、普段あまり耳慣れない「重力波」とは、どこでどうして発生するのでしょうか。ブラックホールの運動や超新星爆発のような、超巨大・超激しい現象に伴ってのみ起こるのであれば、宇宙の中でも特異な波のように思われますが、実は質量（を持ったモノ）が動けば重力波が発生する〔もうすこし堅苦しく言えば質量の非対称な加速度運動 にともなって〕ということです。だからこの地球上でも ミサイルが飛んだり クインエリザベスが出港したり、あるいは高松さんがフルマラソンを走っているときだって、重力波は発生します。ですから、私たちの身の回りは重力波に充ち満ちている ということになります。しかし、そんな地上で発生する重力波は極端に小さくて、たとえ検出するにしても それにはとてつもない時間がかかります。写真を撮るのに被写体が暗いと、シャッターをバルブにして 何十秒も何十分も露出しないと写らない。これと同じ理屈で、たとえば博多行き“のぞみ”が発する重力波をとらえるには おそらく何十億年もの“露出”時間がかかることでしょう。

さてさて、では日本での重力波観測態勢はどうなっているのでしょうか。実は日本では、あのニュートリノでノーベル賞に輝いた梶田さんが主導している“KAGRA”という実験施設が、岐阜県の“スーパーカミオカンデ”のすぐ側に建設中されています。これも原理は“LIGO”とほぼ同じL字型レーザー干渉計で、一辺の長さ 3 キロメートルですから、“LIGO”に匹敵する精度が得られるはずで。私はこの“KAGRA”がうまくいけば、梶田さんが 二つ目のノーベル賞をもらうかもしれない、一人で二度の受賞となれば あのキュリー夫人以来の快挙ではないか と ひそかに期待していたのですが、最初の観測という名誉では、ライゴに先を越されてしまいました。

しかし、重力波観測--重力波天文学は、やっと始まったばかりです。入口の扉が開いたばかり というよりは やっと扉を開く準備ができたところ といった方がいいかも知れません。今後日本でも大きな成果が挙がる可能性は充分にあります。いままで“見えなかった”ブラックホールが “見える”存在になったわけですから その正体や 形成、合体のプロセス等が次々と暴かれてゆくでしょう。さらに、いま宇宙で最も大きな謎のひとつとされている“ダークマター”の正体に迫る成果が得られることも期待されます。100年前 アインシュタインによって変革がもたらされた 時間と空間の構造に関する概念が、更なる発展を遂げ、今世紀中に物理学の新たな革命が成し遂げられることも、夢ではないかも知れません。それと同時に、新たな課題も次々と見つかるに違いありません。物理学の世界では一つの謎が解き明かされると、その何倍もの新しい謎が姿を現してきます。そして このことこそが、“科学をする”醍醐味と云えるのではないのでしょうか。



Japanese Food Culture

Kate Deaux

I'd like to share with you my joy of exploring and discovering Japanese foods.

Back home in the USA, I think most people know of sushi, miso soup, and ramen, which is popular now. But there is so much more to Japanese food. And there is still a lot of homemade food culture here. Living here has given me a great opportunity to find out about its richness and diversity.

I remember a number of years ago a friend brought me some of her Obaachan's ume shu. It was WONDERFUL! 20 years old with a rich golden color, and a smooth sweet and tangy taste. I was even more intrigued that it was homemade, and that her grandmother made a batch every year. I wanted to know how.

I never imagined making ume wine would be so easy. I got the jar, ume, rock sugar and liquor at my local supermarket. I put Japanese plums, sugar and alcohol in the jar and then just waited. This was the hardest part, I think. And, sadly, I won't be making any 20 year old umeshu-I drink long before that.

Another food I discovered was on an autumn trip to the Mt Fuji area. I saw the lovely and picturesque persimmons being dried under the eaves of the roofs. They were so beautiful that I took lots of photos of these lovely orange fruits hung on strings. Later I tried these wonderful plump dried delicacies. What a lovely treat! With a bit of research, I found that it's not so difficult to preserve them. Each winter, I look forward to eating these lovely "treasures".



My most helpful food guide has been Kaoru-san. I was introduced to this lovely woman who gives cooking lessons in English and Japanese. And luckily for me, she has a passion for making a lot of homemade preparations.

In her classes, I learned about some of the more traditional recipes. We had a guest visitor, Myoho-san from Oita, tell us about her family's koji factory. They have been making koji for 300 years! I was impressed. Myoho-san showed us how to shiokoji. Simple enough to make, easy to use, and it really adds umami to food.

And thanks to Kaoru-san, I also explored ginnan. In my hometown, we have ginkgo trees, and they are famous for their bad smelling fruit. I could never imagine they were eatable. Late one autumn, I ventured out with Kaoru-san to pick up the fresh and stinky ginnan. Cleaning them was a challenge, but freshly cooked ginkgo nuts are delicious. I like them plainly roasted with salt, and in chawanmushi. Maybe when I go back to my hometown, I'll start picking up the fresh ginnan.

On a trip to Kyoto a couple of years ago, I came across the fascinating world of pickles. I visited the Nishiki Market and found shops that sell every kind of tsukemono one can imagine! I was amazed at the variety. I liked the shibazuke, senmaizuke, and I even dared to taste the narazuke. Pickled in sake lees, it looked so strange to me. But it tasted lovely. The nukazuke too was bizarre in its rice bran bed, but it too very delicious.

I was so impressed with the tsukemono that I searched the internet for recipes. One Japanese American lady's blog caught my attention. She talked of how she took her nukadoko with her on the plane when she traveled. She took it with her because it needed daily care, and because she wanted to share her wonderful pickles with her hosts. Now I really wanted to try making my own! The recipe is simple enough, and I did my best. But in the end, I just couldn't get the needed flavor of the nukadoko (Maybe I didn't age it enough. I've heard good nuka beds are decades old and are passed down from mother to daughter.) Another difficulty was caring for it over vacation. I finally gave up. Luckily, I can enjoy nukazuke from my local green grocery who has makes them.

All in all, I must say that I feel very lucky and happy to be able to enjoy Japan's vast range of foods. It's no surprise to me that UNESCO designated Washoku as an Intangible Culture Heritage. Japanese food culture is indeed a treasure.

滋賀の魅力

藤井 能成

大津・石山を離れてかれこれ 16 年になる。住み慣れていた土地でも時間が経つと地名や見どころなどの記憶が怪しくなって来る。すっかり忘れる去る前にいつ何度訪れても素晴らしかったと印象に残っている所をいくつか記してみたい。

まず挙げられるのは琵琶湖の北西側（湖西北部）の湖周道路である。西近江路の北小松辺りから湖沿いの道に出て、湖中に立つ白鬚神社の朱の鳥居を右手に見ながら高島町に入る。紫式部は鳥居を目印にして上陸し参拝したのであろうか。



高島町に入って直ぐ右折し、湖周道路（県道 304）を行く。萩の浜、近江白浜と、畑と別荘の間の松林を進む。鴨川の橋を渡った所で右折し、湖と松の木内湖の間の古い集落の中を抜けると、再び湖の脇を進む湖周道路に合流する。さらに先に進むと安曇川の河口の南舟木の集落に出る。車を置いて幾筋にも分かれた流れの先へ踏み跡をたどって

出てみると水郷の様な風景である。安曇川本流にかかる橋を渡り、さらに支流の橋を渡って直進すれば新旭町に通ずる湖周道路県道 333 に続く。本流の橋を渡って川沿いに右折すると湖に突き出た河口の岸に県立琵琶湖こどもの国がある。最初訪ねた時は何もない岸边であった。車を草地において河口に出て見たら、河口の流れの中に杭があり、網が括りつけてあった。網の中にはビワコオオナマズと思われる 5・60cm のナマズが 2 匹入っていた。その後 4 月頃であったと思うが、会社の仲間と行った時にルアーを投げてみたら 30cm 位のまるまると太ったウグイが面白いようにヒットした。

以前は北側の支流にかかる橋から先には行けなかったが、その後湖周道路が整備されて湖岸に沿って今津側の新旭町の先へ回れるようになっている。この安曇川河口に発達した扇状地の北側の湖岸の湿地帯には柳の巨木が茂り、その下にノウルシの群生地が広がっている。4・5 月頃は琵琶湖の青と湿地の柳の影が背景となり、ノウルシの黄緑色の花が美しい。陸側の田畑との境に松や桜を植えたその湖周道路を進むと、R161 に出会う辺りからまた湖岸沿いの道になる。そのまま道なりに進めば JR 近江今津駅の前に出るが、湖岸の松林の脇の道を進むと今津港の前に出る。今津港は竹生島に渡る遊覧船の発着港になっている。今津港の前の融雪用パイプを埋め込んだ古い民家の通りを行くと石田川の橋にでる。橋を渡って堤防の上の道を右に進むと小さな漁港がある。漁港の脇を道なりに進みもとの細い湖岸の道路に出て北に進むと、岸边に松林が続く道に出る。今津浜水泳場である。さらに進むと一旦湖周道路に合流するが少し進み右側の道に入ると、再

び見事な松の巨木の並木道に出る。右手の松林の間から竹生島が見え隠れする素晴らしい道である。

さらに北に向かって松林の道を進むと百瀬川の橋となり、すぐにまた知内川を渡る。知内川の先には松林の中に隠れるように珍しく2階建ての奥琵琶湖マキノグランドホテル（旧プリンスホテル）がある。河口近くでは5・6月頃にはコアユを毛ばりで釣っている大勢の釣り人を見る。初夏には琵琶湖の対岸彦根からモーターボートで渡って来て、知内川の浅い流れを上って来た2・30cmのハスに投網を打って、孫達と楽しんでいる人達もいる。

松並木が10km余り続く道もこの先辺りから松林は途切れた道となる。その湖岸のマキノサニービーチ沿いの道を進むと間もなく海津の町である。漁港の近くの湖岸の道路脇には“湖国の味”コアユの佃煮を大きな釜で炊き上げている工場を見かける。

海津は、今は鄙びた街であるが、かつて湖上交通の要路にある港街として栄えた面影が感じられる町並である。湖岸の石垣は伏見城や彦根城等数々の名城の石垣を積み上げてきた穴太（あのを）衆が造った見事な護岸堤である。街には湖魚料理の宮内庁御用達の（有）魚治と並んで“竹生島”の造り酒屋・吉田商店など魅力あふれる店がある。

また桜の時期に海津の近くに来たのなら、海津大崎の桜並木も見逃せない。近くで見ても遠望しても見事な桜並木である。大崎を回り大浦の近くまで湖面に shielded 桜が続く。大崎のトンネルの手前には大崎寺がある。近くには義経の隠れ岩という岸辺もある。大崎寺には安土城落城の際に蒲生賢秀一族が切腹した時の血痕が残る板を天井とした血天井の阿弥陀堂がある。滋賀には血なまぐさい史跡も多く残されている。

ソメイヨシノが咲くより早い時期であれば、R161が海津の町を出た所で上り坂になる辺り左手に清水（しょうず）の桜がある。加賀・前田侯が上洛の際にその美しさに何度も振り返って眺めたことから「見返りの桜」とも呼ばれていて、水上勉の「櫻守」の題材にもなった樹齢300年のアヅマヒガン桜である。

大崎を回って大浦に至ると湖岸の道は県道513になる。先に進み小さな岬をいくつか迂回するとかつての陸の孤島菅浦に着く。菅浦には塩津の方から半島の尾根筋近くにつくられた奥琵琶湖パークウェイ（R513）から下って来ることできる。途中の葛籠尾（つづらお）崎展望台からの琵琶湖と湖北・伊吹山などを一望する景色はすばらしい。ヘアピンカーブを下って来る時、青い琵琶湖に飛び込んでいってしまいそうな感じの道であった。

北湖の岩礁地帯で採れるイワトコナマズは非常に美味らしいが、菅浦の国民宿舎つづらお荘の鮎料理は絶品で、大きな鯉のあらいも大変美味であった。菅浦の漁師に声をかけられて、運良く翌早朝、観光船が到着する前の静かな竹生島に案内してもらったことがある。

中世の大浦と菅浦の争いや惣の実態を示す菅浦の鎮守・須賀神社で発見された

中世文書は貴重であり有名でもあるという。また、菅浦の東側の葛籠尾崎の先端の湖底からは縄文から平安時代までにわたる土器などが多数発見されている。謎が多い湖底遺跡である。

塩津の近くに来て時間があれば、賤ヶ岳にリフトで登ってみるのもよい。賤ヶ岳頂上からの琵琶湖や余呉湖、湖北平野の眺めは抜群によい。リフトの駅から頂上までの山道の足元には小さな無数の墓石が寂しく立ち並び、合戦の凄まじさを今なお彷彿とさせる。

湖東三山（百濟寺、金剛輪寺、西明寺）は以前から有名であったが、暫く前から湖南三山というのを耳にするようになった。湖東三山は琵琶湖の東側、八日市から彦根の間の山際の R307 沿いにおいて交通の便がよいこともあったかもしれない。湖南三山は、常楽寺（西寺）、長寿寺（東寺）、善水寺の三山をいう。西（にし）寺と東（ひがし）寺は石部にあり、聖武天皇の勅願により紫香楽宮の鬼門を封じるために良弁が創建したと伝わる。大型観光バス等の入りにくい地にあり、いずれも静かなたたずまいの、しかし、堂々とした本堂（国宝）である。三井寺の茅葺の仁王門は常楽寺の山門を移築したということで、常楽寺には山門がないが三重塔（国宝）はある。他方、長寿寺の三重塔は信長が安土城摠見寺に移築したため、東寺には跡だけが残っている。春夏秋冬いつ行ってもいい。善水寺は野洲川をはさんで湖南市（旧甲西町）岩根にある本堂が国宝の和銅年間に創建された古刹だという。

行き方は R1 から石部の町に入るのはいかにも味気ないので、旧東海道から行く方を薦めたい。R1 から手原で旧道に入り、旧街道らしい道を道なりに進む。道路が左手に曲がる所で両側に黒っぽい立派な建物が建ち並ぶ所に来る。旧和中散本舗大角家である。予約しておけば見学させてもらえる。京に上る家康の腹痛を快癒させたことで、家康が和中散と命名したという。先に進むと街道は一旦途切れて名神高速道路の下を通り、左に草津線を見ながら少し行くとまた旧道となる。旧街道らしい道を進み、石部東の信号で右折（県道 119）する。街道から分かれて道なりにしばらく進むと前方に山が近づき、三叉路のような分岐点に出る。直進して村に入れば、右手に西寺、左手に東寺がある。村の入口に結界の注連縄が飾られているかもしれない。善水寺は一旦 R1 に出て岩根の信号で県道 13 へ左折するか、旧東海道を三雲の方に進み県道 13 で左折し、田の中の道を直進して岩根の集落に進めば左手の山の中にある。善水寺は訪ね損ねているので、機会あれば行って見たいと思っている。

ところでここまで来ると、平松のウツクシマツという赤松の 1 種の自生地を訪ねて見たい。一本の幹から多数の幹枝が伸びて箒のような姿をした見事な松の喬木である。岡山県のタギョウショウも似た形の赤松で、自生地は日本国内にこの 2 か所しかないと言われている。石部から少し三雲の方に旧街道を行くと標識があるので、標識に従って道なりに進めば自生地に着く。昭和天皇が行幸で訪れたことを示す記念の石碑があった。

大津・石山から石部の湖南三山を訪れるとしたら、草津宿本陣も是非見たい。JR草津駅から天井川であった旧草津川下のトンネルをくぐり瀬田側に出ると、東海道と中山道の分岐点で、その直ぐ右手にある。浅野内匠頭、吉良上野介、土方歳三など歴史上有名な人達が宿泊した記録が残されている。皇女和宮が江戸に下った際の最初の宿泊地・草津宿での夕飯の献立も興味深い。英国の外交官アーネスト・サトウも泊っている。また、明治天皇が行幸で京都に入る際、旅で使った調度品などを最後の宿泊地・草津宿に残している。なお、旧東海道沿いには明治天皇が行幸の時に休息をとった場所が街道沿いの所々に示されている。

旧東海道の街道は石部から三雲まで昔の雰囲気がよく保全されていて趣のある道である。三雲で野洲川（横田川と称した）を渡りしばらく R1 を進むと泉西の信号で右折した直ぐ左側の道へ畑の中を行くと再び旧道となる。街道沿いの水口宿の民家が始まる所の手前で右折し川沿いの道を少し戻ると、大きな常夜灯がある。横田渡の常夜灯で兩岸にある。江戸時代、地方の豪商が往来の安全のため私費で建てたという。鈴鹿峠にも巨大な常夜灯が建てられている。水口の街も比較的昔の面影を残している。水口には西と東に2軒の造り酒屋があるが、草津、石部、三雲などの宿場町には昔からの造り酒屋が今も繁盛している。

ここからは日野・鎌掛（かいがけ）の石楠花の話である。三雲から R1 を進むと水口で日野・水口グリーンバイパスの標識が目につく。ここを左に入り道なりに進むと山あいの素晴らしい道路となる。しばらく進み畑の中の道に出た辺りで R307 と合流する。ここで右折して山王公園下の道を行って県道 41 に出たらまた右折して県道 41 を道なりに行くと鎌掛の町に至る。ここまで来ると石楠花の群生地案内が目に入ると思うので、それに従って進むと、近江ヒルズゴルフ倶楽部の入口の前にでる。石楠花の時期にはその手前か先で駐車して群生地の谷まで徒歩で行くことになる。川沿いの開けた林道なので歩くのも気持ち良い。最近では近江八幡あるいは近江鉄道日野駅からバスが出ていて、保全協力金を払う必要があるようである。林道の右手に砂防・灌漑用の池が見えたら、そのすぐ左手の道に入り少し進めば、石楠花の溪谷に着く。4月末から5月初め頃の花の季節には行列ができる位なので迷うことは無い。溪谷に沿ってしばらく進むと対岸の山の急斜面一面の石楠花の群落が目に入る。かなり上流まで同じ様に、ピンクから白っぽい、あるいは濃紅色の花をつけたシャクナゲが崖の上の方から谷川の流れ近くまで群生している。見事な景観である。この辺り標高 300m から尾根の上でも 400m に届かないので、高山に生育するシャクナゲの群落としては珍しく、昭和 6 年に国の天然記念物に指定されている。地元の人達に聞くと花見と言えば鎌掛のシャクナゲだという。30 分位で谷の右岸（道の左手）から対岸の斜面のシャクナゲを見渡せる展望所につく。砂防工事で作られた石垣の上のテラスに腰をおろして眺めることができる。今はここから先はシャクナゲ保護のため入山出来ないらしいが、私が大津にいた頃はさらに先に登ることができた。松や広葉樹の疎林の中の落葉の積もる斜面を登り奥の尾根の上に出て見ると、さらに広大な群落が向

い側の山の斜面一帯に広がっていて壮観であった。

滋賀県には古代から近代までの多数の史跡や様々な種類の名所旧跡が数え切れないほど県内全体に散在している。あまりに多すぎて焦点を絞るのが難しく、交通機関も限られるために一度には回り切れず、京都や奈良の観光の様に気軽には訪れにくい。30年近く住んでいても、勤めていれば時間も限られていたので、行きそびれて観ていない所の方が多い。近江高島の大溝城址や継体天皇の父・彦主人王（ひこうしおう）のものと言われる古墳、安曇川町の中江藤樹書院跡、葛川坊村の明王院、小谷城址、米原町番場の六波羅探題北条仲時一族430人を祭る蓮花寺、奥石（おいそ）神社、石塔寺（いしどうじ）等々……。古くから大陸渡来人の多かった滋賀県には由緒ある神社も数え切れない。古刹も多い。縄文・弥生・古墳時代の遺跡なども多い。由緒ある祭や行事に合わせて訪ねるのも面白い。金堂の中から大勢の僧侶たちの読経の音が響く三井寺の大晦日の法要行事。長浜の慶雲閣の盆梅展、慶雲閣は明治天皇の行幸の際に宿泊所として建造された日本建築で、その各部屋に飾られた天井まで届くような梅の古木の鉢植えは見事であった。日吉大社の山王際、満開の桜の中、あの絢爛豪華な大神輿を若者達が担いで行われていた勇壮な神事も興味深かった。

最近は道路事情も改善されているし、県内の道路や宿泊施設もかつてよりは格段に良くなっている。多数の観光客が押し寄せて混雑する京都や奈良を敬遠し、日本の歴史や美しい自然に静かに触れられる所を他に探している方には参考にして頂けるのではないかと思います、ご紹介した次第である。なお、滋賀県の案内書では、滋賀県高等学校歴史散歩研究会「滋賀県の歴史散歩」(上・下)(山川出版社)、今谷 明「近江から日本史を読み直す」(講談社現代新書)、水谷 千秋「謎の大王 継体天皇」(文春新書)などが参考になった。少し古いが交通公社の新日本ガイド「近江 若狭」も便利であった。(2016.4.28)



Toko Shinoda
Last of the Japanese Abstract Expressionists

Michelle Arnot



Over 100 years old, Toko Shinoda is producing new work at her studio in the chic Aoyama district of Tokyo. Since age six she has been mixing water with charcoal and perfecting her technique in the art of *shodou* (the way to write). Some days inspiration strikes, other days the *sumi* (ink) goes untouched. Yet Toko Shinoda –last of the Japanese abstract expressionists – observes that “as my body grows weaker my work grows stronger.”

As a calligrapher she has developed her own visual language. Yet she performs primarily to a select audience in her native country.

In February 2011 the landmark Tokyo American Club reopened with great fanfare after a three year facelift. As Japan’s greatest living artist, Shinoda sensei was elected for the inaugural exhibit at its Frederick Harris Gallery. Her lithographs resemble sheet music or sound in motion. Hints of a red sunrise, or the grey mist of a typhoon, evoke the Shinto philosophy that personifies the forces of nature. To give viewers the opportunity to view her images free of preconceptions, she chooses not to name some new pieces.

“When you look at an abstract work from one day to the next, it hasn’t changed --but you have,” she told a reporter. “If you see a piece called *Wind* that is all you can think about. Without a name maybe more conversations will arise between viewer and piece.”

Japanese Calligraphy

Shodou, which translates as the inexact ‘calligraphy,’ is a form of meditation rather than a handwriting exercise. Literally it translates as “the way to write.” Where English calligraphy brings to mind handwritten wedding invitations, the tradition of Japanese calligraphy dates back centuries to ancient China, and requires years of practice much like the traditional art of flower arranging known as *ikebana*.

For Japanese school children *shodou* is a requirement of the early curriculum. As Western children learn how to manage a pen and attempt joined up writing, their Japanese counterparts memorize stroke order and how to manage a paintbrush. For ex pats like me, new to the language and keen to pick up a paintbrush, the exercise presents a complex challenge: First, to understand the importance of stroke order for a selected *kanji* and the correct way to hold the brush. Then, acquire the skill to grind the *sumi* (ink) in a small well and soak the brush with enough ink to recreate the character; and, finally, to produce the correct balance of shapes.

To raise the bar even higher, there are three different styles of writing: *kaisho*, the standard; *gyosho*, like joined up letters; and *sosho* or grass writing,

which is only recreated by the most practiced hand. Each *kanji* can be rendered in all three styles that were developed by the ladies of the court during the poetic Heian era of 794-1185. What makes the practice irresistible are the tools of the trade tucked into the writing box (*suzuri bako*): a brush, a block of charcoal ink (*sumi*), the stone (*suzuri*) and the mini water dropper (*suiteki*).

Rather than signing an artwork by hand, Japanese use a *hanko* (stamp) that is dipped in red ink and applied on the work. Every Japanese citizen carries a *hanko* for signing documents or letters, readily for sale at the corner stationery shop. But for artistic purposes there are craftsmen who carve a bespoke *hanko* in the font of choice.

In Tokyo I was fortunate to find a motherly and accomplished *shodou* sensei, 75 year old Yuriko Nakamura, who nurtured a class once a week. Under her guidance I chose a *hanko* design and had it carved by a master. After years of practice, and reams of wasted practice *washi* (paper), I succeeded in reproducing one good *kanji* (character). With great fanfare, I handed my *hanko* to Nakamura-sensei who applied the seal of approval to the paper in the correct spot.

Early Career

Although the artist was born in Manchuria, number five of a brood of seven children of a Japanese tobacco merchant, she was raised in Gifu in central Japan and considers it her home. Her father, who took a great interest in her education, was intent on setting her on a career path in the traditional arts. In his wildest imaginings, he could never have envisioned the extent to which she would interpret the tools that he bestowed upon her.

Early in her career, Shinoda-sensei taught calligraphy but never fully embraced its parameters. Students practice using black ink while the *sensei* makes corrections in vermilion red. She did not feel comfortable in the role of teacher. Copying the same shapes over and over stifled her. She was determined to adapt the traditional art to the present day sensibility and combine “air in motion and my heart in motion.”

When the Museum of Modern Art included her work in a 1954 calligraphy exhibit, her direction was validated by the abstract art world. Merging the ancient with the modern brought her international acclaim: In 1957 *the New York Times* called her “one of Japan’s leading calligraphic painters” and the Art Institute of Chicago gave her a solo show that traveled to Paris.

In the 1960s there followed additional solo shows in New York, as well as commissions for murals --one at the Kyoto Conference Hall and another for the 1964 Olympics in Tokyo. In 1974 she produced a 28 meter long mural "Past, Present and Future" for the Great Hall at 14th century Zojoji Temple in central Tokyo. The following year she won an award for a book of essays *Sumi-Iro* (The Color of Ink) and participated in a show called "Okada, Shinoda, Tsutaka: Three Pioneers of Abstract Painting in 20th c Japan."

By 1983, as Shinoda turned 70, Time magazine heralded her as the Picasso of Japan. Yet since that declaration, mysteriously, her work fell off the radar of the international art world. A visit in 1999 by the Grand Duchess of Luxembourg failed to spark a revival overseas.

In Shinoda's Studio

"Shinoda-sensei has invited us for tea and for a preview of her current work."

Purchasing a Shinoda put me in the limelight among my esteemed Japanese colleagues.

We met in front of the Nezu Museum, which boasts an impressive private garden in the city among its art treasures. Since Tokyo is notorious for its lack of street addresses, this sort of rendezvous at a landmark is typical. We crossed the avenue to a secondary road where my leader took us into a low rise building and pressed the appropriate bell. The lift took us upstairs where a white-haired housekeeper in Western dress greeted us at the door. We removed our shoes and shuffled down the hall past a wheeled chest (*tansu*). Shinoda -sensei, in a dark kimono befitting a woman of her age and stature, white hair pinned in a bun, welcomed us.

"Please," she invited us around a table by the renowned designer George Nakashima, shifting chairs with surprising nimbleness. Her energy can best be described by the Japanese word *genkii*, which implies strength of health and spirit. As the token *gaijin* (foreigner), I quickly introduced myself as a native New Yorker. This prompted happy memories of the years Shinoda-sensei spent in the city in the late 1950s.

After the Museum of Modern Art acquired one of her pieces in 1954, she was eager to visit the US. Even after so much time, she recalled the delicious food and jolly – in fact, gay—art scene.

Once we drained our cups of green tea, Shinoda-sensei took us into her atelier on the next level of her flat. The connecting flight of stairs was easy to navigate, and she remarked that it keeps her in shape. Along the walls

shelves were stacked with paintings and *washi* (Japanese paper). She pulled out a few pieces that stood nearly as tall as she did. Along the interior wall her brushes hung in a neat row, with the largest ones resembling mops.

The *piece de resistance* was her ink stone: Unlike the standard classroom size, the size of a cigarette pack, hers was as wide as a table top and in fact rested on a table with wheels. She mentioned that it dated from the Song Dynasty, over 500 years old.

The power of her work was astonishing. She discovered lithography in 1960, and explained a little bit about her technique of applying dark *sumi* ink directly on the litho stone before the print is produced. Once the asymmetrical shapes are transferred to paper she adds a brushstroke, drawing from the color spectrum of *sumi* using tones of silver, gold or indigo. Suddenly, she interrupted herself and brought out a simple box from which she pulled a piece of silk.

“This was given to me by the Empress,” she said, displaying shimmering white cloth. (Later I discovered that the artist had just celebrated her March birthday, and perhaps this gift marked the occasion.) “Come,” she beckoned us to the window to view it in natural light.

We admired the gift from her Imperial Majesty Michiko and then, since it was time to leave, we retreated to the vestibule for our shoes. She mentioned how much she was looking forward to spending her summer in her usual way: observing Fuji-san from her house in the mountains.

つながった思い出

湯沢 雍彦

昭和 20 年の日本の敗戦は、国が敗れただけでなく、かなりの個人の職業までも失わせた。私の父は、＜中支那振興＞という国策会社に勤めていたので、敗戦とともに失業し、無収入の身になってしまった。幸い都区内にあった自宅は焼け残ったので、二階のふた間を学生たちに貸部屋することで収入を得ていた。旧制中学 3 年生であった私も、学費くらいは稼がねばと思い、芋の担ぎ屋などいろいろなバイトに励んだ。21 年の夏休み 1 ヶ月間は、父の紹介で新宿区役所の税務課に雇ってもらった。与えられた仕事は、なんと各家庭の不動産評価額の基礎を決める査定であった。戦災で、区役所の書類は全部焼けてしまっていたのである。

お粗末なバラック建てが少しずつ建てられる時代だった。調査員は、目分量で土地の広さを確かめ、建物の質が上中下のどれに当たるかを推量するだけの仕事だが、これが課税の基本になるのだから重要である。その仕事を、バイトの中学生がこなすことは、全くどうかと思われたが、断っていたら収入にならないので、大久保周辺の家々を尋ねるほかなかった。

ほとんどの家では奥さんが対応してくれたが、中で一軒、実にしっかりとした受け答えをする女性にぶつかった。明快な説明が終わった後、お茶をあげると言われて私は入口に腰を下ろした。すると反対に「どこの学校」と聞かれたので「都立第六中です」と答えると、「それなら必ず上の学校へ行くわね。立派な大人になって、この国を建て直して頂戴」と激励されてしまった。そんなことを言う対象者は始めてだったから、16 歳の私は、大いに驚くとともに感激した。その家は平均より少し上質に見えたが、私は思わず低い評価を台帳に書き入れてしまった。

あとで分かったことだが、この女性は＜深尾須磨子＞という、かなり名のある女性詩人だった。

それから 50 年以上もたった後、私は、福島県郡山にある女子大学に勤務したが（お茶の水女子大定年後）、式のとくによく歌われるこの大学の校歌は、この深尾さんの作詞になるものだった。私はその歌が流れるたびに、十代の昔を思い出さずにはいられなかった。その第 2 節だけを紹介しておきたい。

花のすがた 木々のあや 集めてここに幾とせを 励むわれらの生活よ
英知を磨き 愛と知の 理想 理想 理想を仰ぐ

(2016 年 4 月 15 日)

四国瀬戸内の一人旅

高松 良晴

私こと、土木工学科を出てからの就職先の希望は、一つの地域に固定されることなく、日本全国、多くの地域で仕事をするのであった。

幸いにして、日本国有鉄道にもぐりこむことができた。以来、ぼっぼや人生、希望通り、北は北海道から南は九州までの各地で、鉄道の建設・改良、時には運営に従事することができた。

だが、全国1都2府43県のうち、鉄道のない沖縄はともかく、四国の愛媛、徳島の両県内には行っておらず、いつかは、との思いでいた。

それが、新入社員の時から55年、年金生活に入ったのある日、思いかけずに、愛媛、徳島へ、ひよんなことから行けることとなった。

1. 鯛茶漬

今年（平成28年）3月下旬、東京都心の桜が散り始める頃、朝早く東京駅発の東海道新幹線で、久しぶりにカミサンと同じ車両の席に二人並び、カミさんの実家の菩提寺のある大分県杵築市に向かった。

杵築までは、同じ国東半島内の大分空港に近く、航空便なら2時間足らず。一方、鉄道では、日豊線杵築駅まで、東海道・山陽新幹線を小倉で乗りかえ、6時間30分ほど、3倍の時間がかかる。それなのに鉄道での選択。カミさんは、「飛行機は墜ちたらお終り」と敬遠し、「新幹線なら脱線転覆しても、お父さんが働き給料をいただいたところだから仕方がない」と、鉄道で行くこととなった。

杵築は、戦国時代には大友氏と島津氏との戦いの舞台となり、江戸時代は、徳川親藩の能見松平氏が治め、その城跡や坂道の上の武家屋敷の街並みは、九州の小京都とも呼ばれている。河口近くの丘に再建された杵築城天守閣には、旧制杵築中学出身、昭和20年代前後、何度か外務大臣を務めた重光葵の足跡が掲げられている。

当日、散策した、武家屋敷でも、城址公園でも、明るい陽射しであったが、桜の蕾は未だ開花しておらず、道端の菜の花だけが、緑の中に黄色が輝いていた。

豊前沖の漁場に近く、海岸道路沿いのスーパーには、じゃこ、関アジ等と並んで、小鯛のぶりぷりした生きの良い切り身がたっぷり詰まったパックが並んでいる。大分育ちのカミさんの親父さん、鯛茶漬がお好みだったとのこと。杵築城跡近くには、江戸時代からのゴマ垂れの味を受け継いでいるという名代の鯛茶漬の店がある。法事の後の直らいの席での料理の刺身も、厚く、ぶりぷり、そして、こりこりしていた。

旧制五高柔道部で心身を鍛えた親父さん、武家の末裔でもある。ビール会社の営業の最前線に立ちながら、絶対相手に頭を下げることがなかったという。澄んだ穏やかな眼差しで、わっはは、と、恰幅の良い身体を揺すって、

笑い飛ばしておられた、という。親父さんの青春と鯛茶漬が重なる。



2.豊予海峡フェリー

杵築に行くにあたって、カミさんから、「体調に自信が持てないから、帰りは一人でその日の体調に合わせ、適宜帰るから、二人は、杵築で現地解散」との条件がついていた。

それではと、行きとは別のコース、瀬戸内海南沿岸の一人旅、別府港から愛媛県八幡浜港へフェリーで渡り、鉄道で徳島に行き、鳴門・明石架橋を高速バスで渡り、東海道新幹線で東京へ帰ることとした。

朝、ホテルで、いざ出発と、ナップザックを肩にエレベーターを待っていたら、「お元気ですね…」と声をかけられた。同じ年頃の男性、「私も以前は、よく、ザックを肩に歩きまわっていました。でも、近年は体力が衰え、数年前からもっぱら自動車での一人旅となりました」とのこと。逆に、我が身は、東京都心に住むせいだろうか、すでに一昨年、運転免許証を警察へ返還している。全く逆の選択であった。

そういえば、郊外のスーパーで、よぼよぼ歩きのおばさんが、軽自動車に乗った途端、しゃんとして、車をひとり運転し去って行く。自動車の操縦性、性能が、格段に進歩したのだな、との思いとともに、自動車無しでは存在し得ない地方の生活実態を見る思いであった。

別府港で停泊中のフェリーのぱっくり開いた口に、続々と大型トラックから乗用車、そして軽自動車、オートバイが入って行く。3階建て船内客室・ロビーは賑わっていた。だが、その内、車無しの乗船旅客は、せいぜい 10 数人のみであった。ここにも、車社会の姿があった。

別府港から豊予海峡を横切って八幡浜港まで、宇和島運輸フェリーあかつき丸での 2 時間 45 分の船旅、なにか青函連絡船の船内風景とダブルが、こちらの方が明るくござっぱりとし、ソファもあり心地良い。

2 時間近くで海峡を渡ると、四国の最西端に細長く、岬 13 里といわれる延長 50km の瀬戸内海と宇和海を隔てる佐田岬半島、その最先端に白い灯台が船窓より望まれる。半島の丘陵部の稜線には、風力発電の白い風車が林立し、その稜線

の先、瀬戸内海側には四国電力伊方原子力発電所がある。現在では事実上消滅してしまっただが、この細長い半島を縦貫し九州と結ぶ新幹線ルート（松山～大分）の調査が有償資金で行われ、その始末に苦労したことがあった。今では、その半島の頂上には、メロディーラインと呼ばれる国道 197 号が走っている。

3. おはなはん

八幡浜港から予讃線八幡駅まで、地図では近そうだったが、いざ歩いてみると 30 分、意外とかかり、やっとのことで、13 時 06 分発の各駅停車、2 両編成の気動車に間に合った。伊予大洲駅までの車窓、黄色の菜の花は目に入ってくるが、桜の花は未だしであった。

伊予大洲駅でいただいた、「城下町大洲～町並みぶらり地図～」を手に、てくてく歩く。車は行き交うが、人影は殆どなし。肱川の橋を渡り、小 1 時間ほどかけて、やっと、旧市街にある、「おはなはん通り」にたどり着いた。

「おはなはん」、それは、昭和 41 年(1946 年)4 月 4 日から翌年昭和 42 年(1947 年)4 月 1 日まで、毎朝放映された NHK 連続ドラマである。おはなはん通りは、そのロケ地の一つであった。



伊予大洲で生まれ育ち、明治、大正、昭和を、明るく生き抜いた、榎山文江さん演じる「浅尾はな」という、楽天的でお茶目なおてんばな娘の一生を描いた物語であった。松山高等女学校卒業の春、庭の木に登り、高橋幸治演ずる縁談相手の陸軍松山連隊の速水中尉殿が人力車に乗って来るのを眺める場面から始まり、青森での日露戦争出征し無事帰国した中尉殿の死亡、その後、美容師として二人の子供を育て行った物語だ。毎朝、琴の音をバックに「たん、たん…、たん、たん…」というメロディーがはじまると、ほのぼのとした温かさが茶の間に流れ、人気沸騰、平均視聴率は 45%を超えた。

当時独身だった我が身にも、心を和ますものだった。その後、ロケ地となった、城下町伊予大洲の街並み、城跡からの肱川流域の景色など、多くの場面に、折りにふれ、我がカミさんの顔を重ねながら思いを馳せていた。数年前、川口の NHKアーカイブスで、「連続ドラマ・おはなはん」を検索したが、わずかな部分を除き、再現データがなく、再視聴は不可能であった。それだけに、城下町大洲を訪ねたかった。

戦災に遭わなかった旧市街、木造家屋と格子状の狭い街路の町並み、赤煉瓦の建物、さらに、肘川河畔に建つ臥龍山荘は、観光バスツアーの団体客やマイカーの家族連れ等で賑わっていた。昭和レトロの店先のラムネ壺に郷愁を感じる。木造 2 階建て古屋の階段や壁に、テレビ「おはなはん」の、見覚えのある場面の大判のパネルが架かっている。

だが、中年のおばさん達が、「よく知らないけど、ずっと前の朝ドラなのよね…」と言い置きながら、立ち止まりもせずに、出口から通りに出て行った。思わず、我が身の歳を指折った。

河畔では、白い桜がぼつんぼつんと咲き始め、幟はためく城址公園、夏を待ち係留中の鵜飼船を眺め、また、肘川橋を渡り、伊予大洲駅に向け、長い道のりを歩く。観光スポットから外れた道筋の商店街、開いている店は少なく、ここでも人影はまばらであった。一方、少し離れて並行の国道からは、自動車の行き交う音が聞こえていた。

4. 坂の上の雲と道後温泉本館

司馬遼太郎の代表作「坂の上の雲」は、我が国が封建社会から近代国家を目指して変わろうとする時に、坂道の上に浮かぶ雲を掴もうと、目指し努力し生き抜いた、城下町松山で生まれ育った、俳句の正岡子規、陸軍の秋山好古・海軍の秋山真之兄弟、3人の交友を通し、その時代を描いたものであった。

ただ、思うに、坂の上の雲を目指したのは、正岡子規・秋山兄弟だけではでない。どの分野にも、どの時代にも、数多くの人々が、坂の上の雲を目指していたはずである。鉄道の分野でも、多くの方々が、同様に坂の上の雲を目指し、唯一度の一生をかけておられた。その集大成が、今や先進国の仲間入りしている我が日本の現在がある。

かような思いを込めて、数年前、拙著「もう一つの坂の上の雲 鉄道ルート形成史」（日刊工業新聞社）を書かせていただいた。

伊予大洲駅から短絡ルートの内子経由のディーゼル特急で松山駅着。駅構内は、日曜日の夕方のせいだろうか、閑散としているが、コンビニ店舗の照明だけは輝いている。

駅前広場に面したビジネスホテルにザックを置き、タオルを手に、駅前停留場から2両編成の路面電車（伊予鉄道）に乗る。電車は松山城庭園の外周に沿って市役所前、県庁前とまわり、道後温泉まで20分、運賃は160円。途中、城址の外縁、大きなビルが建ち並ぶ大街道停留所では、客の乗り入れが多い。案内図を見ると、近くには「坂の上の雲ミュージアム」、「秋山兄弟生誕地」と記されている。この時、どういうわけか、NHK大河ドラマ「坂の上の雲」で、正岡子規が、東京根岸の病床で、欧米の駐在武官から帰国した秋山真之に、「真さんは、広い世界を見てきたが、私はより深い世界を見ている」と語った場面が思い出された。

道後温泉駅から、煌々と明かりが輝くアーケード下、人混みの土産物商店街を、子供を乗せた人力車の後を歩いて10分ほど、木造三層楼の共同浴場、道後温泉本館に着く。

出入り口は雑踏、やっと下駄箱の空きを見つけ、1階神の湯の入浴券（410円）買う。着替え場も人の群れ、浴槽の端は人で一杯だったが、熱くもなく、ぬるくもなく、心地良く、じつくりと湯に浸かっていた。

道後温泉乃町の初代町長伊佐庭如矢（いさには ゆきや）が、老朽化した道後温泉を、当時としては莫大な金をかけて、棟梁に城大工坂本又八郎を起用し、反対意見の多い中、道後温泉本館を明治 27 年（1894 年）竣工させ、引き続き、伊佐庭は、鉄道を引き込み、道後温泉を大イベントセンターと育てあげた。本館は、夏目漱石「ぼっちゃん」にも記載され、現在では共同温泉施設としては唯一、重要文化財と指定されている。

伊予松山、なにか、明治の人の心意気を感じさせる街であった。

5. 十河信二記念館

朝早く、松山から普通電車で 2 時間、伊予西条で途中下車。東海道新幹線生みの親とも言われる第 4 代国鉄総裁十河信二ゆかりの地である。

彼は、旧制西条中学を卒業し、戦後、第 2 代西条市長をも勤めている。

伊予西条駅に接する鉄道歴史パークの一角に「十河信二記念館」がある。大きなガラス窓の木造 2 階建て建物、中に入ると、展示室の床まわり、塵一つなく清掃されている。

十河の座右の銘「有法子」（成せばなる）の自書の書が掲げられている。その思いで、東海道新幹線は着工したが、総事業費は、当初の 1,972 億円が 3,700 億円へと 2 倍近い増額となり、十河は国鉄総裁を辞任することになる。その折の記者会見の写真が、「老兵の 消えて跡なき 夏野かな」の句とともに掲げられてもいた。

DVD の映像の中で十河が思いの丈を語っている。「東海道新幹線着工にあたって、佐藤総理に世界銀行からの借款をおねがいした。僅かな額でも世界銀行から借りた以上、たとえ総工事費が増えても、我が国の信用から、もう工事を途中で止めるわけには行かなくなる…」

何度となく、その姿を見、音声を聞いていると、「十河さんは、やはり、東海道新幹線の建設費が相当増額になることを十分認識していたのだな」との思いとなった。

昭和 37 年 4 月 1 日、国鉄入社式で、怒鳴るような大きな声で演説をしておられた老総裁の姿が、妙に懐かしく思いだされた。そして、塵一つない展示室が、改めて爽やかに感じられ、再度展示の一つひとつを見直し、そして、外に出て、十河信二記念館を振り返った。



6. 大平正芳回想録

伊予西条駅からの電車は、伊予（愛媛県）から讃岐（香川県）に入る。「長浜」、「観音寺」との駅名が、田園風景の中に続く。「都市に田園の良さを！ 田園に都市の良さを！」と唱えた政治家大平正芳の生まれ育った土地である。大平は、「政治

家である前に人間らしい人間として生きたい」と念じていたともいう。

昭和 55 年（1980 年）6 月 12 日、大平正芳は、首相在任のまま、東京虎ノ門病院にて心筋梗塞で、70 年 3 カ月の生涯を閉じた。5 月 16 日、野党提出の内閣不信任決議案が可決され、衆議院を解散し、衆参同時選挙を闘っている最中のことであった。私も、中央線の駅前で、大平首相が、街宣車の上で、身振り手振りで、声を高め、応援演説をしているのを、間近かに見聞きしていた。あんなにお元気そうだったのに、現職総理の意外な急死であった。

新聞紙上、大平首相の国会答弁は、「あー、うー」と揶揄されたが、その速記録を読み直すと、理路整然たる名文となっていた、と言う。

長浜町の尋常小学校では、目立たなかった少年が、官を志し、大成し、昭和 47 年（1972 年）9 月、日中国交正常化のため、田中角栄首相に外務大臣として随行し、北京で周恩来首相、姬外相と交渉にあたり、国交回復の日中共同声明をとりまとめている。



大平は、オックスフォードの歴史家の論文の次の一節を好んだ。

「バラの花はいつしかしなびて落ちるであろう。永久に咲き誇るバラはない。バラは、いつかは落ちる。それをわかっていながら、毎日丹精して水をやるのが、歴史であり、人生である。」

予讃線からの車窓の田園風景を背景に、大平総理の穏やかな顔が浮かびあがり、そこに、「大平正芳回想録」の一節一節の記述が、テロップのように流れて行った。

7. 本四架橋

予讃線、丸亀、宇多津、坂出と高架化した駅が続く。本四架橋瀬戸大橋ルート（児島～宇多津）開通に合わせ、四国側アプローチとして整備されたものだ。

本州と四国を橋で結ぼう、との構想は明治 22 年（1889 年）頃から語られてきたが、具体化の動きは、播但連絡船せきれい丸沈没事故（昭和 20 年）、青函連絡船洞爺丸沈没事故（昭和 29 年）、宇高連絡線紫雲丸沈没事故（昭和 30 年）を契機に、地元で架橋運動が盛り上がった。

昭和 48 年（1973 年）10 月に、建設・運輸両大臣より工事認可を受け、神戸・鳴門ルート、児島・坂出ルートが道路・鉄道併用橋として、尾道・今治ルートは道路単独橋として、それぞれ建設することとなり、11 月 25 日に起工式を行うこととなった。ところが、そのわずか 5 日前、昭和 48 年（1973 年）11 月 20 日、政府は石油危機による総需要抑制策の一環として、本州四国連絡橋の着工をすべて延期した。

ようやく紆余曲折を経て、5 年後の昭和 53 年（1978 年）10 月に、まず、1 ルート 3 橋（児島・坂出ルート及び大鳴門橋、大三島橋・因島大橋）が優先順位第

一位として着工され、その後、残り2ルート全域も順次着工されることとなった。そして、昭和63年(1988年)4月に児島・坂出ルート(瀬戸大橋線)が、平成10年(1998年)4月に明石・鳴門ルートが、そして、平成18年(2006年)4月には尾道・今治ルート(西瀬戸しまなみ海道)が、それぞれ開通し、構想から117年、本州四国連絡橋3ルート全線が完成したこととなった。

昭和58年8月から62年3月まで(1983年~87年)、私は、国鉄経営計画室や運輸省国有鉄道部で、岡山と坂出を結ぶ鉄道、瀬戸大橋の本四備讃線(茶屋町~坂出)の工事計画に関わった。線路配線図を手に、宇多津駅の高松、松山への配線、坂出駅・丸亀駅の高架化、鉄道工事費の増額などを、国鉄本社内、大蔵省主計局などとやりとりしていた。

松山駅構内の柱に、「四国の新幹線実現を目指して」(四国の鉄道高速化連絡会)の大きなポスターがはってあった。

瀬戸大橋は岡山~高知間の四国横断新幹線、大鳴門橋は大阪~徳島~高松~松山~大分間の四国新幹線、それぞれの基本計画を前提に道路・鉄道併用橋が可能な設計となっている。だが、明石大橋着工時に、関係大臣合意として、「明石海峡大橋は道路単独橋に変更し、本州・淡路島間の鉄道計画については、別途検討する」とされ、明石海峡大橋は道路単独橋として建設された。さらに、平成20年度(2008年度)5月、国土交通省は、それまで行ってきた四国新幹線の地質調査を、「事業の目途が立たない状況での調査費支出は如何なものか」との批判を受け取りやめている。地元も国土交通省も、鉄道高速化の視点は、児島・坂出ルートを活用する在来線直通のフリーゲージトレイン実現へ向いている。伊予西条の鉄道歴史パークには、予讃線多度津~坂出間を試験走行した、第2次試験車が広場に展示されていた。

徳島からは、神戸淡路鳴門自動車道経由の神戸・大阪行き的高速バスが、20~30分間隔ででている。バスの車窓から、大鳴門橋直下の渦潮、淡路島の山並みを眺めて、明石海峡大橋からは海岸に白い建物が浮かぶ南フランスのニース海岸を彷彿する景色が目飛び込んでくる。明石海峡大橋神戸方の主塔直下の舞子インターまで1時間30分余り。

エスカレーターで下り、山陽線舞子駅から新大阪・東京へと直行。

東京都心の住まい、ワンルームには、すでに前日、カミさんは帰っていた。カミさんの友人から送られてきたという、ミカンが籠一杯にあふれている。愛媛県今治産の「ひめポン」とのこと。「デコポン」は熊本果実連の登録商標なので、「ひめポン」と呼ぶことにしたという。普段スーパーでは高価でなかなか買えそうもない。むしゃむしゃと味わう。美味しい、ともう一つ。伊予路の一人旅を思い返しながら、カミサンのご指示「杵築で現地解散」で、良かったな、と思った。

(平成28年4月27日記)

つくしくらぶ ―活動の経緯と理念―

我が国は、自国語の日本語によってほぼ全ての日常生活が完結され得る国です。それだけに来日した欧米ビジネスマンの多くにとって、国際都市東京に於いて英語がほとんど役にたたないことは大きな驚きであり、また自らは、“読めない、聞けない、書けない、話せない”の四重苦に陥いる現実に愕然とします。日常生活やビジネスのやりとりの中で非常に異なった価値観、いわゆる 異文化の世界の中で途方にくれ、不本意な思いで帰国する事例が多くみられます。その背景には、歴史伝統からの文化慣習の差による 異文化の壁があります。

平成 11 年来、英語でコミュニケーションのできる家庭婦人達が集まり、業務で来日生活する外国人及び家族が遭遇する文化慣習の違いから生ずる諸問題の解決を目的として、「つくしくらぶ」の名で支援活動を行ってきました。

“つくしくらぶ”の名は、“(人に)尽くす”との意味を込め、同時に、雪解けの春の野に顔を出し“自ら伸びやかに育つ”土筆の姿を思い描いています。

異文化は、なにも国と国との間にだけあるものではありません。同じ国の中にも、個人どうしの中にもあります。文化はどちらが正しく、どちらが悪いというものではありません。それぞれの正しさを主張しあうところに紛争や憎しみが生じがちです。それゆえ、私どもは、お互いが相手との違いを理解し、その違いを尊重し合うことこそが、相互理解を可能にするとの考えで、これまで活動し、これからも活動してまいります。

これらの活動を明確に位置づけるため、内閣府に特定非営利活動法人としての設立申請を行い、平成 18 年 9 月 5 日、その認証(府国生第 859 号)を取得しました。

また、これを機会に、国内外のビジネスや技術開発など、長年業務に携わった経験豊富な方々の知恵や工夫をも活動に生かして行くこととしています。



平成 28 年 5 月(第 10 卷 特別号)貝坂倶楽部

発行所 NPO つくしくらぶ出版

102-0092 東京都千代田区隼町

2-12 藤和半蔵門コープ 801

Email: tpine304@nifty.com